

「ます」と「そうろう」の文法化を促すもの: Dasher (1995),
Traugott & Dasher (2004)の分析に見える問題点

Kim, Alan Hyun-Oak

1. 本稿では最近とみに注目を引いている文法化理論を日本語の敬語現象の分析に援用した二つの研究、Dasher (1995)のスタンフォード博士論文、Traugott の英語の通時的資料を前者の日本語のそれと組み合わせた Traugott & Dasher (2004)を対象にする。これらの研究では、誘発類推(invited inference)や隠喩化、換喩化などの概念を援用することによって文法化過程を分析、敬語表現が 素材文領域から丁寧文領域へとたどる連続変異、主観化、間主観化の過程などを豊かな通時的資料をもとに詳細に分析している。本稿では、上記の二つの研究で取り上げられている「ます」と「そうろう」の文法化の誘因に関する分析に焦点を当て、幾つかの問題点を指摘し、それらに対するより合理的な対案を提示する。
2. 「ます」は「いく/あげる/する」のような三つの違った形の素材主語の敬語形から授受の「差し上げる」の謙譲形を、そして丁寧機能の「まする」を経て現在の「ます」になったとしているが、そのような特殊な変化を促すきっかけについてはこれといった説明が見られない。さらに、候補になれる敬意素性を持つ語彙が二三に限られるものでないにもかかわらず、それらを排除する制約がなんであったも明らかにされていない。「そうろう」の文法化にしても、発生初期の「さぶらふ」は敬語素性が欠ける単なる「待つ」の動詞から素材敬語（尊敬）素性を獲得したあと、「どこどこにいる」の意味に定着すると共に音韻変化を経て第三段階の聞き手向け敬語「そうろう」へと移行したとしている。しかし、この場合も会話に頻出する「待つ」のような有力な候補を排除する理由も明らかにされていない。また、尊敬敬語から謙譲、そして、丁寧のタイプへとという極めて過激な転換を可能にする要因が何であったかに対する説明も期待される。
3. 本稿では、「ます」も「そうろう」も共に元々から聞き手向け敬語になれる意味素性をあわせもっていたものであり、内容の陳述を聞き手に伝える、いうなれば、「伝達・報告」の動詞であったとする。前者は「まらする/まっする」、後者は「そうろうくさぶらふ」に由来し、両者ともある事柄を一つの封筒のような伝達様式に収めて上位者に贈呈するという一種の隠喩現象であると解する。尊敬>謙譲>丁寧という機能領域の変換は陳述文の項構造における項役割の転換を前提するものであって、単純な鞍替えでないことが強調される。
4. 文法によって規制されるある語彙 A が元の形を捨てて他の形 B に変容する場合、つまり、文法化が起こる場合、このような文法化は最も経済的で無駄がなく、最も合理的且つ単純でなければならず、特別な付加条件のかからない近距離プロセスでなければならないとするごく一般的な制約を提案する。

参考文献

Dasher, Richard B. 1995. Grammaticalization in the system of Japanese predicate honorifics. Doctoral Dissertation. Stanford University.

Traugott, C. Elizabeth and Dasher, Richard B. 2004. *Regularity in semantic change*.
Cambridge, UK: Cambridge University Press.

アラン・ヒョンオク・キム. 2014. メタファー体系としての敬語：日本語におけるその支配原理. 東京：明石書店. [Kim, Alan Hyun-Oak. 2014. *Grammatical Encoding of Politeness: A systemic Metaphorization of Japanese honorifics*. Tokyo: Akashi Shoten.